

人と自然とのかかわりを通し

子どもが「生きる力」を発揮する学習活動の創造

<1年次>

1 いのち・環境教育ブロック

2年2組 授業者 松本充恵子先生

(1)自評

- ・「いのち」をテーマに、生きものとのかかわりで授業を組んだ。
- ・生きものを直接接触するという体験の少なさを感じていた。
- ・まず、生き物を探しに行った。自宅の周りや学校の周り。
- ・いのちを大切にするというのは、生きものを好きになる、大事にする、生き物の気持ちになってみる、ということではないか。
- ・仲良くなるには、すみかを作ってやらないとと本時に入った。
- ・生き物を飼うことと生命を大切にすることに矛盾することがある難しさを感じる。

(2)話し合い

- ・すみか作りに集中していたが、その生きものに適したすみかというイメージができていたのかどうか、活動の様子から見極めが難しかった。
- ・すみかがイメージできる資料がほしい。
- ・おたまじゃくしグループに、どう支援したらよかったのか。(最後に水を捨ててしまった)
- ・田んぼを見に行き、「ほら、やっぱり、きれいだ。」と汚れた水を捨てる。
そこで、松本先生は「いろいろやってみて、いいんだ。」と支援。
- ・授業の視点を明確にしていくことが必要だ。どうかかわりもてば、我々はよしとするのか。
- ・グループ作りに問題があったのでは。自分が捕まえた生きものでないものにかかわっていた子どもたちは、自分の思いと一致しない活動になったのでは。いのちにかかわっていくという姿勢は、どの子にも見られた。
- ・自分で捕まえた班とそうでない班とでは、すみかのイメージを持つところで差が出た。
- ・今まで、ふれることのない生き物にふれる機会を実現できたのでは。
- ・今まで、さわったことのないものにさわったことの意義。「あんまりさわると、死ぬからな。」きりふきをしたところに、クワガタがすぐもぐりに行ったところを見ることができて喜んでいて。自分がしたこと、生きものが反応してくれた喜びを味わった子どももいた。
- ・「入れていいの？」というつぶやきがあった。すみかができて、入れてみたときの観察に着目させると良かったのでは。
- ・グループ作りが、かかわりの強弱に影響することが見えてきた。(自分の思いをもってグループに入っているかどうか)

<松本充恵子先生の授業から見えてきたこと>

- 1 一人ひとりの願いや思いの実現を大事にする。
- 2 一人ひとりの願いや思いが弱いまま、グループになってかかわっても、充実した学び合いになりにくい。
- 3 生き物に触るという実体験、泥遊びという実体験の重要性。
- 4 生きものとかかわる学習活動が「感動する心」を生み出す。
- 5 いのちを大切にすること それは、生きものを好きになること。生きものの気持ちになってみる。他にも どういうことがあてたい。

2 運動ブロック

3年 授業者 軽部暁美先生・庄司光代先生

(1)自評

<軽部先生>

- ・かかわりながら、楽しめるようにと表現に取り組んだ。
- ・はじめは、体ほぐし運動も、子どもたちの動きが固かった。まねできない。
- ・どう動いたことがいいのか、見極める点が難しい。(評価)

<庄司先生>

- ・私は、集団行動についていられない子どもに主に、ついていた。
- ・女子が、心を開放して体を動かすことが難しかった。
- ・物語としたことで、かえって動きが創造できないグループも出てきた。

*運動ブロック

- ・中、高学年ごとのねらいがちがう。低学年は「動く」、中学年「よい動き」、高学年は「よりよい動き」

(2)話し合い

- ・グループ作りは？
- ・生活グループ。給食も共に食べていて、生活を共にしているので話し合いがしやすい。
- ・イメージでわけると、偏りがあると考えた。
- ・場面を設定していた子がいたので、動きをイメージ化しやすいのではと、場を取り入れた。子どものこだわりは、動きと物語だった。
- ・<菊池室長さんからの指摘>
 - 一つ一つの動きのダイナミックさを作っていくために、授業以外で、ビデオや本を見せるなどしてイメージ化をはかっていたか。
 - ・ストーリーと動きのどちらが主だったのか？
 - ・ストーリーでなく、動きの組み合わせでやりたかった。
 - ・子どもの動きがどう変化していたのか。どんな工夫で変わったのか、が見られる視点を持ったらどうだったのか。
 - ・「たたかい」ではなく、3つの技を使ってあるところに到達するというような「動き」を重視する想定が考えられたのでは。
- ・いろいろなイメージで動かしたいとしたら、話し合いで出てきた「言葉」を取り入れるな

ど工夫できたのでは。友達の動きの良いところを見せ合うところがあっても良かったのでは。

- ・相互評価・・・ Tくんが友達に△をつけていたが、どう指導者がかかわればよかったか。
- ・動きのイメージをつかみやすくするために、基本の動きをいくつかつかませて、それをいかせるようにしていくとふくらむのでは。基本+工夫にストーリーをつけていく。

動き・・・大、小の組み合わせ・スピードの速い遅い・リズムカル・連続・組み合わせ

腕支持の動き

- ・話し合いが体を休める時間になりがちなので、ストーリーはしぼっておいて、動きの工夫に力を入れさせる。
- ・前の動きが次の動きにつながる。
- ・動きの質を学習させるのか、動きのストーリーを学習させるのか。
- ・仲間とかかわるとき共通の話題にしぼってやる。
- ・ Tくん、教師の支援でグループの活動に参加できていた。

<軽部曉美先生・庄司光代先生の授業から見てきたこと>

- 1 体をほぐすことが、心をほぐすことにつながるようだ。「鏡になろう」
- 2 鏡になってまねすることは、言葉ではないが体全体から相手の思いを受け止めるというかわりが生まれる。言葉を伝え合うことだけでなく、相手の表情や身体から伝わることを受けとめることも並行して進めていくといいようだ。
体育が研究されているのも、そういう理由からかもしれない。
- 3 「忍者」という題材が子どもを引き付ける。いろいろな学習活動に発展しそうだ。
- 4 子ども主体にしようと考え、つい、子どもに多くをまかせようと思ってしまう。(私も)しかし、ねらいをしぼり、重要な部分を子ども主体とし学習を展開するといいようだ。
- 5 体育でのかわりも、その量と質をしぼっていくといいようだ。

3 佐竹先生からのご指導

- ・体育の研究が増えている。
- ・クワガタグループでは、はじめのうちは、話し合いができていなかった。が、しだいに本気になっていく様子が見られた。最後に、「クワガタが気に入ってくれた。」
- ・体育 話し合いが上手。グループの人にふっていた。場面を限定してやると、動きの工夫のほうへ向かったのでは。
- ・生活 Kグループ、Oグループで、相互にかかわりあう姿が見られた。
- ・グループ活動を取り入れる際の留意点

グループの活動を子どもの学習の連続性の中で点検する。一人ひとりの思いやこだわりの方はどうだったか。

Yグループは「おれのクワガタ」「おれの木」といっていた。自分のこだわりで、やりたい思いがあったのでは。支援と評価で見たとき。

- ・めあての確認のところ、もっとこうしたいという自分の思いを出させては。具体的に言え

